高・大・一般　漢字（楷書A）

※楷書A、Bは段級をとわず両方出品も可。



加藤　東陽

孔子廟堂碑（虞世南）④



參天兩地

※落款（署名）には「東陽臨」と記しています。「東陽（雅号）」が臨書した、という意味になります。

――落款の記し方――

・臨書の場合は「○○臨」とします。
・他者の作った文・文章で、漢字のみの場合は「○○書」とします。
・自分の作った文・文章の場合は、「書」を省くことが多いです。
・右の「○○」には、自分の名（太郎・花子など）や雅号（東陽・清泉など）を記し、姓（鈴木・田中など）にはしません。

〈解説〉

今月は、「孔子廟堂碑」の最終回です。

この碑の原石は早くに失われ、拓本のみが伝わっていますが、①全体的に丸みを帯びた字形、②ゆるやかな転折、③伸びやかで長めの右払いや縦画などが特徴です。

こうした特徴をもつ虞法は、伸びやかで気品に満ちた「楷書の規範」と評されています。

今月は、まとめの気持ちで書き上げましょう。

〈学習上の留意点〉

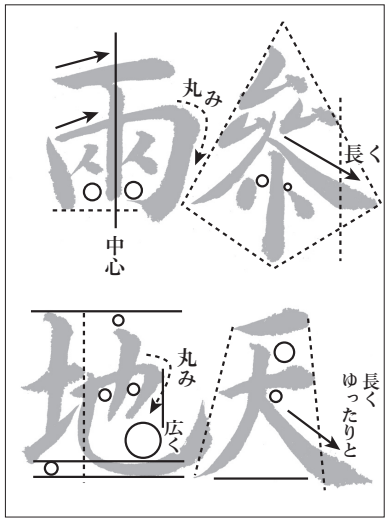
「參」…「參」の書写体です。上部を小さめに、下部を広くして、右払いを長く、ゆったりと書かれています。

「天」…横画は右上がりに、長短に留意して、最終画の右払いは、長く伸びやかに書きましょう。

「兩」…「両」の書写体です。横画を右上がりに、三画目の折れは、丸みに留意して表現しましょう。

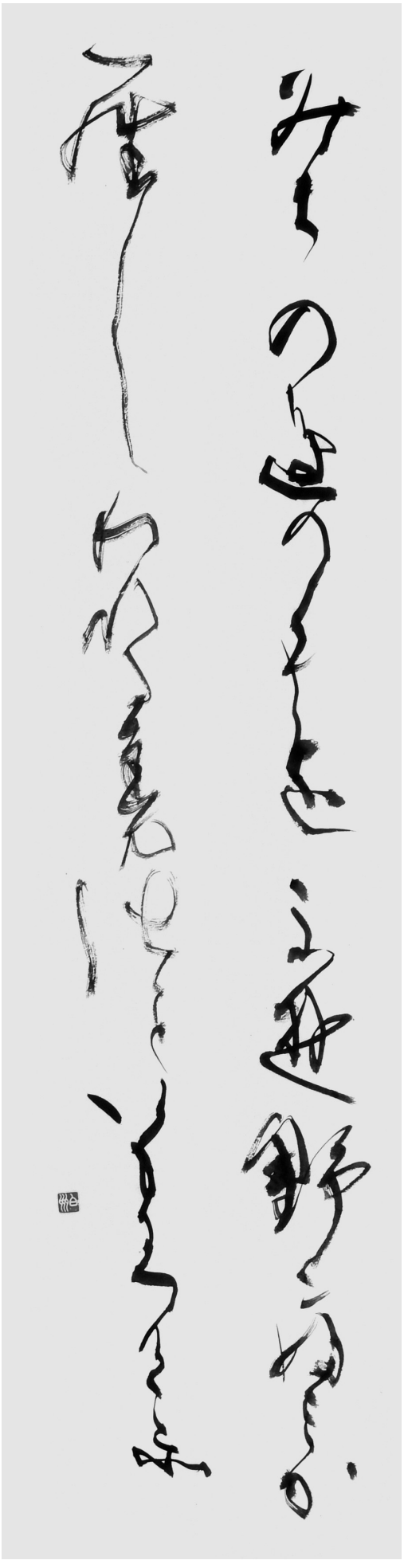
「地」…偏小旁大の形ですが、特に偏と旁の縦画の位置（長さ）と方向の違いに気をつけましょう。最終画の曲がりは、広くゆったりと、余裕をもって大きく書きましょう。

※〈参天両地〉天地と徳を一にするほどに、全てのものに通じていること。



高・大・一般　仮名

新(10)級から五段までは作品用紙として画仙紙八ッ切り（68cm×17.5cm）又は、画仙紙半切（136cm×35cm）の出品。六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切（136cm×35cm）のみの出品です。



増田　与久

〈釈文〉みちのべ（遊二婦三羅）のくさをふゆ野にふみからし
われたちまつといもにつげこそ（多遅万徒爾介所）

〈出典〉『万葉集（まんようしゅう）』　※作者未詳

〈歌意〉道の辺の草を冬野の枯れ草になるほど踏みつけ、じっと立って待っていると、あの子に告げてください。

〈揮毫上の留意点〉

書は「時間の芸術」といわれています。書き出しから、どのように時間が経過していくのかをイメージして書きたいものです。

参考手本は油煙墨を使い、にじみのない加工紙に兼毫筆（けんごうひつ）で書きました。いくつかの古筆をイメージして書きましたが、どれか一つの書風に限定して書いたものではありません。針切（はりぎれ）や西行（さいぎょう）系の仮名の「下へ下へ」と向かう動きと左右の文字の関係性を意識しました。

一行目は左右の振幅とひらがなと変体仮名の対比を、二行目は起承転結のうち、「転」から「結」へと向かう物語を考えて書きました。動きとしてつながるのか、いったん呼吸を整えて、新しい場面展開に移るのか、いろいろと工夫してみてください。

仮名の書は、「変化と統一」が特に大切です。単純な文字のとなりは複雑な文字、右上がりと右下がりの配分、上下の文字同士の距離、筆が紙に触れていないときの空中動作など、さまざまな要素を織り交ぜて、運筆を工夫してみましょう。仮名作品に慣れている方は、さらに「筆の角度や深さ」の展開を表現できるように試みていただけたらと思います。